

落語「文藝部」

紫水街

新入生、部室に入ってくる。

部長「やッ。君はもしかして入部希望者」

新入生「もしかしなくても入部希望者ですよ」

部長「嬉しいことだなア」

新入生「ところで、ここは文藝部の部室で合ってますよね」

部長「そうだよ。ここは九州大学文藝部の部室、伊都課外活

動施設Ⅰの三〇九号室だ。舌を噛みそうな名前だね」

新入生「ところで、文藝部って何をするサークルなんですか」

部長「なんだなんだ、君、そんなことも知らずに入ろうとしてたのかね」

新入生「なんだかものすごくすごい部だって聞いたから……」

部長「うーん、ここはすんげえ部じゃなくてぶんげい部だよ」

新入生「アララ、間違えてた」

部長、肩を落とす。

新入生「失礼しました、それではこれで」

部長「オイオイ待てよ、せっかくだから文藝部の歴史ぐらい

聞いていきたまえ」

新入生「ほほう、歴史とな」

部長「うむ。文藝部は実に数百年の伝統を誇る部でな、なん

と九州大学の前身である九州工科大学ができる頃にはもう既に存在していたという。まず九州大学文藝部があり、それから九州大学が生まれたのだよ。卵が先か、鶏が先かというやつさ」

新入生「ウーン、にわかには信じがたい話だなア」

部長「そりゃあそうだ、嘘だもの」

新入生、ずっこける。

部長「そんなに前からあるわけがないだろう。でも、君が親

御さんのお腹の中に入っていた頃にはもう文藝部は活動していたのだよ。これは本当サ」

新入生「へえ、すごいや」

部長「棚を探せば、その頃の写真や文集だつて埃と一緒に出てくる」

新入生「整理とか掃除とか、しないんですか」

部長「それは言わない約束だよ」

新入生「失礼。ところで、文集ってどんなものなの」

部長「文集？ 文集は部員の小説や詩、エッセイを集めて一冊の本にしたものさ。部誌とも呼ばれ、部員の血と汗と涙とその他モロモロの液体が染み込み」

新入生「バッチイなあ」

部長「まア、そう言うな。ほれ、見てみなさい、最近の部誌は印刷所で製本してるんだ。本格的だしとてもキレイだろう」

新入生「やあ、本当だ……うわア、なんだいこの小説は。おん

もしろーい！」

部長 「お気に召したようだね」

新入生 「これ、すごいや。もらって帰りたいくらいだ」

部長 「そうかい？ 実は、部員になれば、持って帰っていいんだよ。学祭号なんかは有料で販売するけどね、普通は無料さ……なのはどうして棚の中に溜まってゆくのか、どうして皆持って帰らないのか。増えてゆくばかりじゃないか。武士は食わねど高楊枝、部誌は減らねど場所は減る。おーいおいおい、わしゃ悲しい、おーいおいおい」

部長、机に突っ伏して泣きわめく。

新入生 「泣いちゃったよ」

部長 「ごほん。見苦しいところを見せてしまつてすまなかつたね」

新入生 「部屋に入った時から見苦しいので大丈夫ですよ」

部長 「ヤレヤレ、慰めてるのか貶してるのかわかりやしない。それでね、初年度はなんと部費が無料なのさ」

新入生 「ええッ！ そんなら文藝部に入りたい！」

部長 「ゲンキンだなあ」

新入生 「他にはどんな活動をしているのかな？」

部長 「そうだね、まずは部会だね。月に一回あるんだけど、出席する部員が少なすぎて毎回『部会に来たのは、これで全部かい？』なんて言ってるよ」

新入生 「山田クーン、部長さんの座布団全部持つって」

部長 「冗談はさておき、部会の他には読書会、合評会」

新入生 「コンパ、夏合宿」

部長 「そうそう……ってアレ？ どうして知ってるんだい」

新入生 「このサイトに書いてあったよ」

部長 「おお！ そのサイトは現編集長が命を注ぎ込んで作り上げた文藝部公式ホームページだね。彼の技術は部内に並ぶ者がないとまで言われているよ」

新入生 「へえ、すごいや。じゃあ部長は何ができるの？」

部長 「……」

新入生 「部長に選ばれるぐらいだから、きつとすごい技術や実績を持つてるんだらうなア〜」

部長 「もうやめたまえ。また泣いてしまう」

新入生 「これは失敬」

部長 「あと、何か質問などはあるかね？」

新入生 「じゃあ、一つだけ。終わりが近づいてきたのにこの話におチが見えないけれど、一体全体どうするつもりだい？」

部長 「オイオイ、何言ってるんだ。君が入試におチなかつたからここにいるんじゃないか」

新入生 「こりゃ一本取られた。それでは」

部長＆新入生 「お後がよろしいよううで」

日本語を勉強してきた。

なぜならわたしの母は物語を日本語で綴ったから。母の物語は様々な言語に翻訳され、中国語、韓国語、ロシア語、フランス語、そして英語を母語とする人々の記憶に照らされた。言語の壁を越えていく度、物語は国境を移ろっていった。まるで病のようだとなつたしは感じる。移ろい続け、変形し、性質を変容させ、そして文字として昇華する際には、まるで別物へと変化してしまふ。そんな物語の営みを、わたしは病という存在に重ねてしまふ。

わたしはイギリス人として英語を母語としてきた。そのことには誇りを感じている。わたしはこの王国を愛している。しかし、わたしの本当の王国は「日本」に存在するらしい。

「日本ってさ、テーマパークがすごいらしいよ」

小学校時代、外国への関心が強い友人がそう教えてくれた。

「テーマパークってオルトン・タワーズみたいなの？」

「ぜんぜん違うよ。確かにオルトン・タワーズは楽しいけれど。でもね、日本のそれは規模が違うの。なんとたつて国全体がテーマパークなんだもの！」

クールジャパン。アジアのコンテンツ大国。

——王国。わたしの日本への印象は、小学校の教室の一番後

ろの席で交わされた会話によって決定された。

和食、歌舞伎、相撲、落語、わびさび。アニメ、漫画、小説、ゲーム。日本が所有するコンテンツを国際的戦力として活用したクールジャパン戦略。その果ての果て。文化王国、日本。

そして、母の物語は日本というプラットフォームにおいて重要な位置を占めているらしい、ということの後わたしは知る。母は日本人で、現在わたしと共に暮らしている父はイギリス人だ。二人はわたしが幼いころに離婚している。そんな母の職業を教えられたのは、わたしが中学生になつたばかりのことだ。情報源はまたもやあの女の子。

「ねえ、この作家ってあなたとどこか似ている気がしない？」

見せられたのは、日本の小説の英訳本。その著者近影。そこに写っていた女性は、最近、父の書齋を掃除している際に偶然発見した写真の中で見た記憶があった。そう、父と手を握るかつての母の姿と女性作家の顔は、みごとに一致していたのだ。母は日本でも五本の指に入るほどのベストセラー作家だった。王国の一角を担う存在。そんな人物の血がわたしの身体の中を巡っている。そのことに心が僅かばかり躍った。

「ねえねえ、ここ見てよ」

友人が指し示すのは、本の一番後ろ、あとがきのページ。

『この物語は、わたしの娘へと宛てたものなのです。彼女がこの物語を読んで、笑顔になってくれることを心から望みます』

——その言葉が、わたしが日本語を学び始めるきっかけとなつたことは、言うまでもないだろう。母の物語を、母の使う言

DTMの時代

保井海佑

人通りの多い街の一角で、フリッツ・クライスラーの「前奏曲とアレグロ」が重々しく鳴り響き始めた時、少女らの、最後の演奏会が幕を開けていた。演奏していたのは、みすばらしい服を着た二人の少女だった。片方はギターで伴奏を弾き、もう片方はヴァイオリンで主旋律を奏でていた。

二人の少女らは、日々の食費を捻り出すためにストリート・ミュージシャンとして活動していた。経済格差の激しさが増すこの時代において、親を持たない貧困層の幼女らが生きてゆくためにできることは、売春行為を行うか、特技を活かして路上ライブをするかだった。売春行為の方が得られる額は多かったが、産みの親の売春時の避妊失敗により誕生した彼女らにとって売春は忌むべきものであり、その採扱は憚られた。数少ない演奏可能な曲の中でも、「前奏曲とアレグロ」は少女らのお気に入りだった。短調で始まるこの曲は、大半が物悲しい調子なのだが、最後の最後で長調に転じて明るい音をフェルマータで伸ばして終わる。少女らは、これを自分たちの人生に重ね合わせていた。つまり二人は誕生時から常に空腹を強いられ毎晩固い床での就寝を余儀なくされてきたが、それでも明るい未来がどこかで待っているに違いないと盲信し、現状の厳しい生活もいつか幸せなものに転ずる筈だと考えていたのだ。そのように夢想することで、少女らは貧困極まる生活を耐え忍んでいた。

想いが通じたのか、苦しい生活を送る中でいつしか少女らは

才能を目覚めさせ、得られる金銭も日増しに多額化していった。SNSによって次第に知名度を上げ、番組取材を受けた後はさらに認知度を高めた。そして某日、ある裕福な男性が契約を持ち掛けてきた。彼はきちんとした衣食住の提供に加えて正規の音楽教育も用意すると、少女らに申し出たのだ。契約書には様々なことが書かれていたが、少女らは思いもよらぬ好機に舞い上がってしまった、よく読みもせずにサインを済ませた。

最初の半年は、本当に天国のような日々だった。有能な音楽教師が毎日三人も交代でやって来て一日中少女らを練習に取り組ませたから、少女らはほぼ外出の機会もなく自動演奏機械のように毎日楽器を奏で続けねばならなかったが、路上ライブ時代に比べれば、このくらいどうってことはなかった。男性は滅多に少女らと口を利かなかったが、最低限の衣食住だけは確保してくれたので、少女らは満足だった。しかし天国は永遠でなかった。デスクトップ・ミュージックの時代が到来したのだ。

DTMという省略形で呼称されるこのコンピュータによる楽曲制作方法は、ほんの数年前までいかにも機械の合成音という感じの演奏しかできなかったが、近年飛躍的に進歩を遂げた人工知能の研究応用によってDTM技術に革命が生じ、従来は人間にのみ奏で分け可能だった微妙な表現の違いまでも比較的簡易な操作でコンピュータ上で制作できるようになった。結果、人間が演奏技術獲得に努力する意味は、どこにもなくなってしまうのだ。だから契約主であるあの裕福な男性は、少女らに見切りをつけて音楽教育の提供を中断した。そして彼は契約通り少女らに売春行為を命じ、これまでの衣食費と教育費との合

計金額が貯まるまで働き続けるよう指示したのだった。そのような契約が法律上認められるのか、若い少女らには判じ得なかつたし、そもそも少女らは疑問すら抱かなかつた。彼女らは、これをそのまま運命として受け入れたのだった。

売春婦に身を転ずる直前、少女らは一生のお願いだと言って最後の路上ライブの上演許可を契約主に求めた。所詮売春婦の娘は売春婦となつて人生を終えるしかないのだと半ば諦観していたものの、かつて生活を支えてくれた道行く人々に、演奏によつて感謝の意を伝えたかつたのだ。気付けば少女らは契約して以来、人前での演奏からすつかり遠ざかつていた。それで男性の許しを得た少女らが上演曲に選出したのが、お気に入り「前奏曲とアレグロ」だつたというわけだ。しかし悲痛なことに、少女らの演奏に注目する者は皆無だつた。歩行者らの大半は両耳にイヤホンを挿入していたからだつた。イヤホンから流れ出る音楽はDTMで制作されたものに違いなかつた。少女らの目からは自然と涙が溢れてきた。わたしたちの音楽を欲する者なんてどこにもいない——そう思うと肩が震え、嗚咽おなげが漏れ、もう演奏どころではなかつた。それでも少女らは二人とも、決して演奏を途絶えさせなかつた。何しろ、これが人生最後の演奏になるかもしれないからだ。「前奏曲とアレグロ」は、音程もリズムも崩壊寸前の状態で、長調に転じるあの終結部を迎えた。……その時、奇跡が起つた。少女らは一瞬、何が起こつたのか判断がつかかなかつた。ブラボーと叫ぶ声が聞こえたかと思うと、どっと大きな拍手の音が鳴り渡り、小銭や紙幣が飛び交つた。目元を拭い、涙でぼやけていた視界を明瞭化さ

せた少女らが目にしたのは、少女らへの称賛を惜しまない大勢の観客だつた。突然のできごとで少女らは、なぜみんな急に演奏を聴き始めたのだらうと首を捻る他なかつた。だが歩行者らは夜がふけるまで、ポロポロの服を着て泣きながら演奏する幼き女子らへの賛辞を止めなかつた。人々が感動したのは演奏そのものではなかつた。貧困にも悲運にもめげず、必死で演奏を続ける少女たち——そんなストーリーにこそ人々は感動し得たのだ。人々は物語を希求していたのだ。

少女らは集まつた金を元に、契約主からの逃避を決断した。演奏旅行をしながら契約主の悪質な罠から逃げようと考えたのだ。もはや少女らは、楽譜通りに演奏することはなかつた。あえて下手に演奏することは、打算的だと言えどもそれまでだが、生身の人間による演奏の価値は下手に演奏できる点にあるということを身体で覚えた少女らにとり、そのような批判は意に介するものでなかつた。二人の少女は、終わりのないライブツアーを通して、人々に感動を与え続けたのだった。

● ———— なかなかよくできてるじゃないか。

——— 確かに。自分で言うのも何だけど、初めて作つたにしてはそこそこの出来だと思う。それにしても、これだけのクオリティの音楽と声が全部フリーソフトで合成できるなんて、いい時代になつたものだな。

アニメ制作サークルに属する二人の学生が、自らの作品を評して言った。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁の場合は、お取り替えいたしますので九州大学文藝部までご連絡ください。

本書の一部あるいは全部を無断で転写・複写することは法律で認められた場合を除き、著作権の侵害にあたります。

新入生歓迎号

2016年3月28日初版発行

発行	水町遼祐（文藝部部長）
編集	水谷亮介
執筆	紫水街、新士悟、保井海佑
表紙	紫水街
印刷所	九州大学文藝部部室
